

日本赤十字九州国際看護大学学術情報リポジトリ

タイトル	ラウンドテーブル：大学・大学院の学術コミュニティへの新規参入者に対する日本語表現能力育成の可能性：専門日本語教育分野の蓄積からの支援策を考える
著者	大島 弥生, 二通 信子, 因 京子, 山本 富美子
掲載誌	大学教育学会誌, 30(2) : pp 59-61.
発行年	2008.
版	publisher
URL	http://id.nii.ac.jp/1127/00000397/

<利用について>

- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの著作権は、執筆者、出版社(学協会)などが有します。
- ・本リポジトリに登録されているコンテンツの利用については、著作権法に規定されている私的使用や引用などの範囲内で行ってください。
- ・著作権に規定されている私的使用や引用などの範囲を超える利用を行う場合には、著作権者の許諾を得てください。
- ・ただし、著作権者から著作権等管理事業者(学術著作権協会、日本著作出版権管理システムなど)に権利委託されているコンテンツの利用手続については各著作権等管理事業者に確認してください。

大学・大学院の学術コミュニティへの新規参入者に対する 日本語表現能力育成の可能性

— 専門日本語教育分野の蓄積からの支援策を考える —

大 島 弥 生・二 通 信 子・因 京 子・山 本 富 美 子
(東京海洋大学) (東京大学) (日本赤十字九州国際看護大学) (武蔵野大学)

〔キーワード：日本語表現関連科目、アカデミック・ライティング、論文のスキーマ、引用と剽窃〕

1. ラウンドテーブルの企画趣旨と概要 (大島)

大学・大学院生にとって論理的な文章を書く力は必須であるが、従来、その育成は初年次の日本語表現関連科目、各科目のレポート、ゼミ、卒論指導などを通して間接的に行われ、学習者の自主努力が期待されていた。しかし、入学者の多様化にともない、教員や先輩の文章を参考にして書くよう指導するといった非明示的な方法では対応しきれなくなっている。さらに、インターネット普及に伴い、剽窃を避け適切に文献を引用することの指導も必須となっている。一方、留学生を主対象とした専門日本語教育(JSP)の分野では、書き手を学術コミュニティへの新規参入者と捉え、当該分野の文章の構成要素の分析に基づいてその特徴に気づかせ、文章産出のプロセスにのっとって訓練する手法が研究されている。

本ラウンドテーブルでは、一般の日本人大学生などの大学・大学院での「書く力」の育成にこれらの手法を利用する方策について検討を行った。

まず2. では、引用をめぐる問題を中心に、学生の状況について発表した。つぎに3. では、レポート作成支援を通じて分析的・批判的・論理的思考力と問題発見・解決能力を養成する方法について、実践に基づき紹介があった。さらに4. では、実際の学生の文章を紹介しながら、論理的構造に対する感受性を伸ばすための支援方法について提案があった。また5. では、共同研究者の佐藤勢紀子氏(東北大学)から学生への調査と実践にもとづき、授業の展開・応用についての提案があった。これらの発表・報告をもとに討議が行われた。

2. 学生の現状とライティング教育の課題(二通)

発表者は以前、レポート指導に関する大学教員対象のアンケート調査(二通1996)、及び留学生や一般の教員に対するインタビュー調査(二通2003)を行った。それら

の調査においては、レポート作成のための基礎的な訓練(例えば、主題の設定、文献についての批判的な読み、論述のしかたなど)の必要性が多く教員から指摘された。また、留学生からは、教科書や文献の読み取りの問題、専門の内容に関する背景知識や語彙の不足、論理を組み立てることの難しさ、教師からのフィードバックの欠如などの問題が挙げられている。これらは日本人学生にも共通する問題であろう。

本発表では、上記の調査結果をもとに大学におけるライティング教育の課題について概観するとともに、学生のレポートに多発する「剽窃」の問題に関連して、文献や資料の利用や引用の方法に焦点をあてた授業の内容を報告し、大学でのライティング指導の可能性について参加者とともに検討した。質疑では、インターネットからの剽窃の問題や、高校までの「調べレポート」作成などでの引用についての指導不足が提起された。また、書く課題の負荷が高まると、習ったはずの引用文型が使えなくなるという問題も指摘された。これらの問題提起を受け、学生に対して、情報のレベルとその適切な取り込み方法を段階的に示すことの重要性が示された。

3. 教育方法の提案①：アカデミックな文章の構想段階での支援手法(山本)

最近、留学生の上級日本語科目で提供している「アカデミック・ジャパニーズ」、すなわち大学で必要とされる日本語の運用能力そのものを伸ばしたいと望む日本人学生が増えている。日本人学生向けのレポート・論文作成支援の科目としてはすでにスタディスキルズや学修技法などがあり、専門科目やゼミでも多くのレポート作成が課されて訓練を積んでいるにもかかわらず、彼らは、実際に書く・話すという学習活動を通して、自分自身の考えを日本語でうまく表現する能力を身に付けたいと考えている。それは、単に、レポート・論文の言語構造や言語形式を与え、剽窃はいけないといっても身につかない。レポートのテーマをどのように絞るのか、必要な情報を

捜して自分自身の考えを表現するにはどうしたらいいのか、他者を説得するにはどのような構成にしたらいいのかなど、レポート作成の構想段階でその思考・作業プロセスを具体的に明示化し、学生自身が自分の抱いている問題を意識化できるように支援する必要がある。自分自身の問題として客観的に把握した上で、問題解決のための具体的な方策を学習すれば、言語構造、言語形式は自分自身の考えを表現するための言語手段として身につくやすくなる。

発表では、留学生に対する実践の紹介があり、日本人学生からも同種の授業を受けたいという要望が出ていることを受けて、応用の可能性が示された。

4. 教育方法の提案②：論理的文章についての感受性を伸ばすには（因）

アカデミック・ジャパニーズ、とりわけライティングの力をつける上での大きな課題の一つは、目標文章の完成形についてのイメージ、〈スキーマ〉を獲得することである。スキーマは、文章を書いていく上で内容や構造や語彙・表現などが適切かどうかを判断する感受性を支える。アカデミック・ジャパニーズの新規参入者の中には社会人大学院生など学術以外の分野でそれなりに文章を書いてきた人もいるが、そうした経験にもかかわらず学術的文章の作成に苦勞することが珍しくない。それは、文章の構造を支える論理、思考の進め方が異なるからである。学術的文章を書くには、新たな思考展開の方法を認識し内在化する必要がある。そのための訓練は、具体的表現の操作を通して行うしかない。

具体的には、非母語話者に対する日本語教育で用いられる方法が母語話者にも応用できると考えられる。回り道のようなものであるが、書く前に読むこと、それも、構造を意識化する読みかたをすることが必要である。例えば、将来投稿する可能性のある学術雑誌に掲載された論文を用いて、研究の背景、目的、研究に用いた方法・仮説・モデル、主要な結果、結論を示す部分を認識する（ムーブ分析）。想定される読者を認識し、ジャンル特有の言語特徴、論文特有の言語特徴、ムーブに応じた言語特徴を抜き出す（項目分析）などの活動ができるだろう。

発表では、母語話者であっても文章の論理展開に問題がある例や、日本語の語彙力が乏しくても論理展開に成功している例など、実例にもとづく問題提起があり、論理性の養成の重要性についての問題意識をフロアとも共有した。

5. 実践報告と提案：具体的な論述パターンと言語形式の提示（佐藤）

学術的文章作成における倫理的基準が示され、構想段階での支援を得て自分の問題意識が明確に認識され、〈ムーブ分析〉によって文章の〈スキーマ〉が獲得されれば、レポートや論文を書き始める準備は整う。しかし、実際に文章を書くとなると、アカデミックな文章にふさわしい具体的な論述パターンや言語形式がわからないために書けないというケースが少なくない。この問題は留学生のみならず、学術コミュニティへの新規参入者としての日本人学生にも広く認められる。レポートや論文の各部分で実際に使われる論述のパターンや文型・表現に関する情報を提供する必要がある。留学生対象のライティング教材（アカデミック・ジャパニーズ研究会2002など）を日本人学生の指導にも応用することが可能である。その際に重要なことは、専門分野ごとの論述パターンや言語形式の異同を把握した上で、その共通部分を中心に指導し、相違点については自分の専門分野の論文等の分析を通じて各学習者に認識させることである。中核となる共通の教材を用いると同時に、各専門分野の教員により推薦された〈サンプル論文〉を利用して分野特有の論述パターンや言語形式への注意を促すことが有効である（佐藤2006）。

報告では、留学生に対する実践の紹介にもとづき、日本語母語話者学生に対する応用についても提案があった。フロアからは、教材やフィードバック・添削の方法の問題点が提起された。報告者からは、学生自身が自分で文章を直すプロセスの重要性が指摘された。また、頻出する誤用を学生に公開して注意を促す手法も紹介された。

6. 討議の内容と今後の課題

以上のような発表・報告に対し、討議では、まず、大学生・大学院生の文章力の諸段階に応じた指導の重要性が指摘された。その中で、フロアから、高校までに受けてきた教育との関連、小論文形式の入試の広まりとの関連について問題提起があった。このような高大連携の必要性とともに、大学内の他の科目群と日本語表現科目との連携の必要性についても指摘があった。

さらに、対象となる文章ジャンルの選択肢を広げることの利点にも触れられた。たとえば、文章に苦手意識がある学生に対して自己開示的な文章をきっかけづくりに利用する、言語文化を語用論的に分析する手段として漫画を利用する、などの例が紹介された。学習の各段階に

応じたさまざまな文章ジャンルの利用法の提案は、この分野の教授法の今後の課題であろう。

また、学生のやる気の維持についても、大きな課題として多くの発言があった。これに対して、1年生に将来の目標として実際の卒業論文を回覧させて動機を高める、大学院生のティーチング・アシスタントから文章表現力の必要性を訴えてもらう、学生同士の協働推敲の機会を作る、留学生と母語話者学生との合同クラスでお互いに関心を出し合って文章作成プロセスを活性化させる、などの実践アイデアがフロアと報告者から紹介された。このように、学習動機を喚起するために学習者同士が相互にリソースになりあう、より身近な役割モデルを見つける、といった支援策は重要だが、まだ実践の紹介が少ない。今後さらに分析が必要となる側面といえる。

以上のような活発な討議を通じて、本ラウンドテーブルは、企画・報告者らにとっても、日本語母語話者・非母語話者に共通する目標文章の言語学的分析、および彼らの言語表現の持つ問題の共通点と相違点に対する言語教育学的分析の重要性を再確認できる機会となった。一方で、彼らの文章の読み手は大学教員全体であり、将来的には社会全体であり、大学でこの分野の支援にたずさわる教員の幅は広いことから、言語学・言語教育学からの発信と異分野間教師の連携を、FD等を通じて行っていくことも欠かせない。これらの点が今後の課題として再認識されたといえる。

参考文献

- アカデミック・ジャパニーズ研究会 (2002) 『大学・大学院留学生の日本語④ 論文作成編』アルク。
大島弥生 (2003) 「日本語アカデミック・ライティング教

育の可能性—日本語非母語・母語話者双方に資するものを目指して—」『言語文化と日本語教育』2003年増刊特集号, 198-224.

門倉正美ほか編著 (2006) 『アカデミック・ジャパニーズの挑戦』ひつじ書房。

佐藤勢紀子 (2006) 「多様な専門分野のサンプル論文を用いたアカデミック・ライティングの指導法」『専門日本語教育研究』8, 39-44.

因京子・村岡貴子・米田由喜代・仁科喜久子・深尾百合子・大谷晋也 (2007) 「日本語専門文書作成支援の方向—理系専門日本語教育の観点から—」『専門日本語教育研究』第9号, 55-60, 専門日本語教育学会。

二通信子 (1996) 「レポート指導に関するアンケート調査の報告」『北海学園大学学園論集』86・87, 63-68.

二通信子 (2003) 「専門科目でのレポート課題の実態とレポート作成上の問題点—専門教員及び留学生へのインタビューから—」『科学研究費補助金基盤研究A 1「日本留学試験とアカデミック・ジャパニーズ」研究成果中間報告書』(課題番号14208022, 研究代表者門倉正美), 89-100.

山本富美子 (2008) 「レポート・論文作成の構想段階における思考・作業プロセスの可視化の試み」『日本語教育学会2008年度春季大会予稿集』。

付記

本報告に際し、文部科学省の科学研究費補助金(平成20~22年度基盤研究B, 課題番号20320071「論述プロセスの分析・可視化に基づくアカデミック・ライティング指導法の開発」, 研究代表者二通信子)からの助成を得た。